

# 西藏文明の起源及び現状

河 口 慧 海

斯様なことを初に明かにして置きます所以は、西藏の佛教即ちラマイズムを論ずる點に於て大變必要があるからであります。喇嘛教と云ふものは非常に巧妙に出來て居る。さうして或部分は皆佛教の教理を取つて居る。凡て佛教の哲學——少くとも印度に於て最も發達した所の中道論の哲學と唯識論の哲學と此兩つの論が土臺になつて組上がつて居るのが喇嘛教であります。而して何う云ふ風に組上がつて何う云ふ風に行ふことになつたかと云ふと、ラマイズムは、方法は何うでも宜い、佛に成りさへすれば宜い、其佛に成るには速くならなければならぬ、遅くてはいかぬ。斯う云ふのであります。而して其喇嘛教に於てはどんなことを行ふかと言ひますと、それは非常なものであつて、總て佛の戒めた所のものを悉く反對に行ふのです。單に反對に行ふのみならず、其ものをば神聖化して修行の方式として行はせる。例へば酒を飲むと云ふことは佛は全然戒めて居る。然るに酒を飲まなければ智慧は得られないと云ふ。それは普通の酒ではいけない、法を行つて其酒を飲めば其人は必ず智慧を得る。又肉を食はなければいぬ。肉を食ふのは所謂慈悲を得ることである。肉を食ふことに因つて慈悲が増すのである。何故ならば

食はれた所の肉はさう云ふ善い人の腹に這入つて其人を成立たせるので、其肉の所持主であつた所の動物が成佛出来る。是の如くに觀じて食すれば實に是れは結構な事である、と、次に佛教に於ては、僧侶たる者は不姪と云つて婦人に觸れることが出来ない。在家は然うでない。在家の方は不邪姪と云つて唯自分の妻の外に或は夫の外に邪なる姪をせないと云ふことが戒になつて居る。在家の人は別であつて、邪姪を守ればそれで完全なものである。所が出家は不姪である。何故不姪であるかと云ふのに、佛道修行を専門にやる僧は、姪を行ずるといふ其れが爲に心を亂される、其れに愛著することになる、それから子が出来ると子を愛すると云ふ觀念が出て、それが爲に盡さなければならぬことになつて精神的佛教の淨徳を以て社會の爲に盡すことが出来なくなる。其故に社會の爲に自分を犠牲にして行く所の僧侶は何うしても妻と云ふものに關係があつてはならぬと云ふので釋迦如來は之を禁ぜられた。僧侶と云ふものは唯々世間から遁れて寺の内暮して居ると云ふのではない、社會の福田となつて社會の爲に働いて幸福を進めると云ふ處に其本能がある。一意専心此事をやる爲には何うしても姪を禁じなければならぬ。

然るに喇嘛教では姪を行ぜなければ佛に成れないと云ふ。座禪をするのに二つの曼茶羅四つの灌頂と云ふものがありまして、初の灌頂では姪を行じない。第二の灌頂になつた時分には是非男女交合して座禪に入らなければ速く佛になれぬと云ふ。其事を詳しく説きますと非常に猥褻に互る氣味があるので詳しく説くことは出来ないであります。つまり其れに依つていろ／＼座禪の階級を経て行つて而して急

に佛になると云ふのです。然らば何んな風な具合に速く佛になれるかと云ふと最勝樂と云ふものを交合の時に受けて其れが精神的になつてしまつて眞の自由の境涯に住することが出来る、其間の方法に就て例へば精液と云ふものは、西藏の學說に依れば頭の頂上にある。それを集めて來て下の方の陰部まで下して行く。其下降の間に何う云ふ座禪を行ずるとか、それを女子の陰部に送らないで其れから上昇する時に何の禪境を経ると云ふ様な事を恐ろしく精しく説たものですが、さう云ふ事をして、唯一日の中にも直ちに凡夫から佛になれる所の立派な法であると云ふて喇嘛教徒は誇つて居る。古來斯かる法が西藏に盛に行はれました大變人心を害したものです。丁度其法が極く盛に行はれたのは今より千百年程前でありますが、パッドマ、サンバーツと云ふ人が印度から這入つて來て弘めたので、それを西藏人は信じて盛にやつた爲に非常に墮落して遂に自ら救ふことが出来なくなつた。

そこで今より五百年程前にツェツンカイフ聖宗喀巴と云ふ偉人が出て、さう云ふことをするのは間違ひであると言つて別の解釋を與へた。肉と云ふものは決して食ふのではない、唯それは慈悲と云ふ語を代表したのである。酒は智慧と云ふ語を代表したのである。男女交合と云ふのは實際に交合するのではなく方便と智慧が一緒になると云ふことを代表したのである。だからさう云ふことをしてはいかぬと云ふ解釋をして、其解釋が盛に用ひられた。今の西藏の法王の如きは此派に屬する人である。併乍ら此派も日本の弘法大師の様に根本的に悪い法を斥けることをしなかつた。さう説明はしたけれども矢張り兩部合體の佛像を安

置して居つた。人間と云ふものは悪い方へは趣き易いからジエ、ズンカーワから五代目の法王は矢張り古派の主義をやりかけた。六代目の法王調音海ツンペン、キョウサイの如きは法王自身が其事を盛に實行して、一晚でも婦人と共に寝ないことはないと云つて自分で謳つて居る位な粹人になつて了つた。此人の作つた俗謡は今尚ほ民間舞踏の上乗の歌として謠はれて居る大抵戀歌である。そこで何うしても西藏佛教と云ふものは兩性佛教から出づることが出来なかつた。であるからして西藏には佛教があると云つても、佛教の經論佛像等は澤山あるが精神に至つては全く別物である。佛が云はれた如き波羅提木叉ボラテ、モクヤは汝等が大師なりとか即究竟と云ふ精神ではない。何をやつても構はぬ、速く佛に成りさへすれば宜いと云ふ精神である。私は實は西藏へ参りまして、さう云ふ悪いことを發見して、善い方のことで西藏の佛教を我國へ持つて來て間に合ふと云ふものは殆ど哲理の上から言つて無ないのを見て失望しました、斯う云ふことが分りました時分に日本の弘法大師は偉いと思ひました。昔弘法大師が支那へ渡つて眞言宗を我國へ持つて來た時分にも既に支那には悪い教が随分來て居つた。祕密宗には左道と右道と兩つある。左道の方は悪い右道の方は本當のものです。西藏では左道が盛に傳へられた。所が日本眞言宗の開祖は左道を傳へず右道の方だけ傳へて、而もそれが日本へ來てから非常に高尚な哲學に成立たせ、十住心論と云ふ書を書いて日本の眞言宗と云ふものを特別に高尚なものにして了つた。それは弘法大師の偉大な處であります。是れは日本國民に取つて非常に結構なことであつて、それが爲に日本には西藏に於けるが如き害が遣ら

なかつた。併ながら我國の眞言宗は左様に結構なものであるに關らず、左道と云ふものが、ちよつと黒子ぐらゐ附いて來た様なことがある。即ち後に後醍醐天皇の時分に立川流と云ふのが出て非常に汚れたことがあつた。けれども是れは本當に弘法大師が御傳へになつたのでないから、其書物を焼き、其像を毀し、其寺を滅してしまつて、今は其型が遺つて居りませぬが、さう云ふ事もあつたのであります。

以上述べた處に依ると西藏國の文明と云ふものは全く取るに足らぬものではないか、と云ふことになります。併し物は皆比較的と言ふものでありまして、日本に較べると實に取るに足らぬけれども、印度人の祕密教と西藏人の祕密教と較べるといふと、それは西藏人の方が高尚であります。印度には印度祕密教と云ふものがある。是れは又倫理を害すること甚しい。其詳しい事は一寸でも申すことが出來ないのであります。併し一寸でも言はぬと云ふと分らぬ様なものですから甚だ困るのであります。印度で私の居りました處ベナレスで行はれて居る祕密教と云ふものは實に甚しいものであります。總ての善い事を神に供養するのは結構なことである、だから交合の快樂を神に供養する、斯う云ふ名の下に甚しい事が行はれて居る。即ち廣い處に家族が集まる。息子も娘も親も女房も皆集まる。唯自分の家の者だけではない、其派に屬した者は皆集まる。さうして肉を食ひ酒を飲みして樂んで暮らす。それが濟んでしまふと、今度はすつかり燈火を消してしまつて、さうして誰でも構はぬ、女に當たれば捉まへて交合の慾を實行する。それで以て神に供養したと云ふことにする。さう云ふ事が今現に行はれて居るのです。併

し其れに就いては英政府でも何うも仕様がなない。斯う云ふ様な恐ろしい淫祠に較べるといふと西藏の方は餘程善い。西藏の方では兎に角さう容易くやれない。修行せないとやれない。普通の坊さんではさういふ事をやつてはならぬと云ふことになつて居る。其處等が比較的に言へば餘程善い處なんです。

又西藏人はラマイズムが這入つた爲にどれだけ進歩したかと云ふと以前に比ぶれば非常に結構なことでありませう。それは何う云ふことであるかと云ふと、西藏人自身は昔はカニバルであつた。つまり人の肉を食ふ種族であつた。之を梵語ではヤクシャと云ふ。日本では夜叉と書いてある。人の肉を食ふ恐ろしい人間であつた。其恐ろしい人間が兎に角佛敎の綱目を信じた爲めに、懺悔するといふ心も生じ、又今では人の肉を食ふと云ふやうなことは全く無いと言つても宜い。又男女の關係も今申した様に宗教的には極く紊れて居る様ではありますけれども、同族間では決して結婚をしない。若し従兄弟が夫婦となるやうなことがあれば西藏の法律に觸れる。縦令政府が罰しないでも其村に置かない。三従兄弟ぐらゐになつて居つても其れが一緒になると村に置かない。何う云ふ譯かと云ふと、若しそう云ふ不倫な事をする者が居ると村の作物が悪くなると云ふのです。即ち村の作物を大切にすると云ふ處から起つて居る。一方には一妻多夫の風俗があるけれども、それは同族間でない限り行はれるのであります。兎に角西藏人は幾分かの制裁をさう云ふ間に定めて居る。又外人などに對しては極く親切であつて、いろ／＼心に有るだけの響應をする。其響應するにもなか／＼外の國の人民よりも愉快にやつて呉れる。印度人など

に較べると餘程行届いたものであります。斯う云ふ點も人に親切にすると云ふ佛教的感化を受けて居る結果であらうと思ひます。又西藏人自身では、極く深くはないけれども因果の道理を信じて居る。例へば人が死んだ時分には今度生れて行く處へ善くある様にと云ふので、其家族の者が出來得るだけ善根をする。此事はなか／＼大に廣くやる。我國などの餘程の慈善家でも及ばない位である。僧侶の如きが死んだ時には何うするかと云ふと、其僧侶の身に附いた物を弟子が皆賣つてしまふ、一つも残さず賣つて金にする。賣るにしても日本の様に古手の物は安いと云ふことはない、何うかすると前に買ふたより高く賣れるのがある。西藏は瘠せた國で容易く物が得られない處であるから古い物でも喜んで買ふ。そこで比較的高く賣れるから金が随分出來る。其金を何うするかと云ふと、學校の圖書館に對して一切藏經を寄附するとか、或は圖書館を立てるとか、寺を建てるとか、或は僧侶に供養するとか、或は乞食に施すと云ふ様なことをする。西藏には妙な乞食があつて、金を澤山溜めて居るのがあつた。なぜ金が溜まるかと云ふと、西藏の乞食は随分貰ひが多い、慈悲善根をすると云ふ人が多いから貰ひも多い。其中でも酒を飲んだりして始末の悪い奴は溜まらぬけれども、始末の好い奴になると金を溜める。さうして若干か溜つて來ると高利貸をする。乞食の高利貸は必ず倒れない、百貸したものなら九十九までは返つて來る。だから段々金が殖える。私の知つて居つた乞食で日本の金にして五千圓ばかり溜めた者がある。それが死ぬ前になつて喇嘛二人と自分の友達を呼んで來て貰つて、そこの土に埋めてある金を掘出した。

掘出して見ると五千圓餘あつた。其金を何うしたかと云ふと、是れで其の寺に一切藏經がないから一切藏經を一部買つて上げて貰ひたいと云ふ。一切藏經は彼地で買ひますとカンジュールと云ふだけが千五百圓する。所が、まだ三千五百圓餘つて居る。それは經を讀む坊さんの讀料として上げて其利子で讀んで貰ひたい。斯う云ふことにして金を出した。乞食すらもさう云ふことをする。又かゝる風俗が盛んな爲に西蔵の人の持つて居る金と云ふものは一箇處に固定して居らない。持主が死ねば必ず他へ轉ずる。であるから瘠せた國ではあるけれども比較的財政の運用が旨く行つて居る。此等は極く佛教の入口の道理である所の因果の理法と云ふことを信じて居る爲に起ることでありませう。死ねば必ず後のあるものである、自分は生れて來る前に悪い事をしたから此世で苦んで居ると云ふやうに信じて居る。それで下等社會の人間は大抵罪の懺悔の爲に巡禮に出掛けると云ふことをする。時としては上流中流の人々も順禮をする。さう云ふ様に善い風俗が大分ありまして、必しも善ばかり受けて居ると云ふ譯でもない。そこで西蔵人は本營の佛教はよう受けなかつたけれども佛教の端くれだけ這入つてそれで善い感化も大部に受けて居る。それが爲に西蔵人は人間の肉を食ふやうな極く野蠻な所から段々進歩して來て今日の如き有様になつて居ると言ふことが出来る。此等の點から考へると幾分か恕することが出来るのであります。もう一つは、何故西蔵の佛教を喇嘛教と云ふか。西蔵では佛よりか喇嘛を尊ぶ。現に喇嘛教の開祖になつたペンマ、チュンネ(藏語にして梵語にはバツドマ、サンバーワ譯蓮華生)と云ふ人が言ひますのに



佛よりも尊い喇嘛である。喇嘛の無い前には佛は無かつた、喇嘛が先であつて佛は後であると、斯う言ふのです。所が佛教では佛より上はない。佛の教と云ふ位であつて、佛より上の者はない。佛ほどの位の權を有つて居るかと云ふと天人師と云ふ權を有つて居る。天は神様、人は人間である。神様でも人間でも迷ふて居るのであつて、即ち神様でも怒つたり泣いたりするから、そんなことで苦みを受ける、佛はそんな苦みを受けない。つまり神様にも人間にも師匠になる所の有難いものであるから天人師と云ふ。是れ以上のものは無いでせう。外の教ではみな神様が一番尊いものとなつて居る。其神様の師匠が佛であると云ふのです。神様の世界即ち天上界と云ふものは六道の中にある。佛は六道の外へ出ただけではない、師匠と云つてからに聲聞、緣覺、菩薩の位を超えて佛に上ぼつてござる。だから佛以上のものはない譯である。然るに西藏では佛より尊い喇嘛と云ふ。なぜ尊いかと云ふと、世間在體の快樂をしながら佛に成る道を教へて呉れるから尊いと云ふのです。佛は困難をしなければ佛に成る道を教へて呉れなかつたが、喇嘛は困難な事をせずに愉快にして居ながら佛に成る道を教へて呉れる、こんな尊いものは無いと云ふことを主張するのであります。それ故に西藏人から言はせると喇嘛教ほど尊いものは無いのです。所が、前に申しました方便即究竟の定義から行くといふと、喇嘛教其ものは全く惡魔の教である、唯佛の言葉を以て飾つたところの惡魔の教であると斷言することが出来るのであります。

以上が先づ佛教と喇嘛教との相異つた點であります。西藏人は此喇嘛教のあることを以て大に誇とし

て居ります。然るに私共は此等の喇嘛教からして少しも益を得ない。唯斯う云ふものがあつて人間が墮落した爲に佛教までが墮落させられて了つたと云ふことを非常に嘆はしいと思ふだけであつて、少しも喇嘛教から善い處を得ないのであります。

然るに茲に一つ西藏に傳へられて居る所の經典と云ふものがあります。それはなか／＼貴いものがあります。支那や日本に無い所の經典もあります。又西藏には印度にあつた經典を西藏に持つて行つて翻譯をする材料にした所のサンスタリットの經典もあります。是れは私が今度行つて初めて發見して參りました。是れまで随分澤山な西藏旅行者や探險家がありました。是れ／＼報告もございましたけれども西藏に斯う云ふ印度から這入つた所の貴い經典があると云ふことを誰も見出すことが出来なかつた。私も前に行つたときには見出すことが出来なかつた。今度行つて非常に骨折つて漸く歸る少し前に得られたのであります。其經典と云ふのは非常に結構なものであります。現に私が持つて歸りましたのは今美術學校に預けてありますが、之を得た順序に就いて非常に面白い話がありまして、國寶になつて居るものを二つ得て參つたのであります。是れは西藏の文明及其現狀と云ふことには餘り關係ありませぬけれども、斯ういふものが存在して其れを取つて歸ることが出来たと云ふことに就いて少し事實のお話を申し上げたいと思ひます。

私の二度目に西藏に這入つた目的と云ふものは、西藏語に翻譯された所の一切藏經を西藏から得て來

ることでありました。それから西藏に傳へられて居る所の印度に於ける歴史の書物を持つて來ること。是れは西藏にしか無い所の歴史の材料があるので非常に貴いものです。何故ならば日本の佛教では義淨三藏が印度に這入つた迄は印度の事が分つて居るが、其以後の事は分つて居らぬ。丁度西洋曆の六百九十年位迄の所は分つて居る。義淨三藏が出てから後に行つた人もあるのでせうが、印度の事を書いたものは殆ど支那の方に傳はつて居らぬ。支那に無いから隨て日本には全く無いのです。ですから紀元六百九十年から千二百二年に至るまでは佛教はあつても其間の歴史と云ふものは空である。所が、其間の歴史が實に完全に西藏に傳はつて居る。さうして印度佛教が何うして滅びたか何う云ふことになつたかと云ふことが明かになつて居る。其歴史を西藏に傳へて居ると云ふことは亦是れ西藏人の非常なる功である。何故ならば西藏人は其時代には澤山印度に行き、又印度からも偉い學者や高僧が西藏に來て西藏人を教へたのであつて、相互に頻繁に往來して居りましたから、其時代に起つた事を實際に見て來て書いたのであるから餘程確實である。歴史の材料としては是れ以上に確實なものを得ることは出來ないだらうと思ふ。さう云ふものが西藏に遺つて居る。そこで在るだけの歴史の材料を悉く持つて來やうと私は願ふた。さうして殆ど絶版になつて居るものまで得ることが出來た。何うしてさう云ふことが出來たかと云ふと、それは私が醫者をして居つたからです。私に掛る病人は大概癒る。癒らないやうな難かしい病人には藥を遣らない。藥を遣つた者は大概癒つた。それで癒るといふと禮を呉れる。西藏では物品の禮であ

りますが、其物品の禮がなか／＼厚いもので、大きな家になると馬一頭とか犂牛一頭とか云つて呉れるそんなものは要らないから、貴下の家に傳はつて居る古い書物があつたら其書物を呉れと言つて貰つたそんなことをして大分書物を手に入れた。ですから私は錢の掛からない上に好い書物を得られた。醫者と云ふものは實に結構なものです。實は藪醫者ほども知つて居らぬのであるけれども、向ふへ行けばなか／＼耆婆扁鵲よりも偉い様に思はれた。私は生理學とか解剖學と云ふものを學んで居る。それから少しは漢方醫位のことも知つて居る。骨繼とか鍼とか、其位なことは覺えて居ります、西藏の醫者にはそんな事が全くないのである、そこで非常に成功して書物を澤山得られたものであります。

所で一番の目的として、西藏に若し在つたら持つて來たい見出したいと思つたのは梵語の原本です。原本は西藏では今まで誰も發見して居らない。私はそれを搜すために拉薩から北方八十五哩許りある所のラテンと云ふ山寺を指して行きました。一萬八千五百呎の高山を二つ程越えて搜しに行つたのです。

昔印度の坊さんでバンデン、アーデシャと云ふ偉い人があつて其の人の第一の弟子が開いた處ですが、其處に在ると思つて行きました。所が一つも無かつた。それからシカツエーと云ふ處へ參つて段々搜しました所が。仕舞にシャルルと云ふ田舎に小さい寺があつて、それはサンスクリットの大學者の建てた寺で其處に書物があると云ふことが分りました。それから政府の許可を得て觀に參りました。さう云ふ寺と云ふものは大抵政府の直轄になつて居るから政府の許可を得ないと寶物などを觀せて貰ふことが出來な

い。そこで自分は許可を得て行きました所が、既に政府の方から報知してありましたので大變歡迎して呉れまして、住職がわざわざ書物の藏めてある寺へ指して案内して呉れました。其時分には丁度冬でありましたが、冬は谷間の寺に居るのです。つまり避寒地になつて居る。避寒地と云つた所が随分寒いけれども、兎に角山の上よりは幾分か暖い。經文の藏まつて居るのは山の上の寺で避暑地であります。

其處へ私は住職と番僧とに案内されて参りましたが、實に用心の好くしてあるのに驚きました。初の門を入つて、次に寺の門を入り、それから臺所の方から通つて奥座敷に抜ける。みな一々門になつて居つて、それから經藏に入る様になつて居る。經藏と云つても、普通の經文を藏めてある所と、秘密經を藏めてある所と、梵典ボクテンを藏めてある所と、三つに分けてある。さうして梵典ボクテンが一番奥になつて居る。實に大切にしてあることがそれで分かつた。愈々經藏に入るにしても錠が卸りてゐる。それを鍵で開けるには封印を切らなければならない。錠を布で巻いて封蠟を上ウに溶して判を捺してある。而も二人立會ふて判を捺してある。其封印を立會ふて調べて間違ないと云ふ所で開けるのです。

いよゝ開けて這入つた所が、中は眞の暗で燈を點けて居るけれども其處で讀む譯に往かぬ。外に出して呉れと言つた所が、どうも政府の命令があるから外に出すのは困ると言ふ。讀む爲めに來たのであるから出して呉れ。讀めるか。無論讀める。それは奇態だ、それでは出して遣らうと言ふので出して呉れた。所が山の上の寺に泊り込んで讀むのでは食事などをするのに都合が悪い。そこで下の寺まで持つ

て行つて彼處で調べるやうにしたいと言ふと、それが宜からうと云ふので遂に山の下の寺まで持出して呉れた。それから一生懸命になつて調べました。一箱が三十九帙ありました。帙と云ふと長さ二尺位に幅が二寸位ある。それはターラと云ふ樹の葉に書いてあるのです。日本では貝多羅と稱へて居る。それから段々調べて見るといろ／＼の經典があります。大般若經もありませんし、秘密部の經文もあります或は戒律經と云ふものもあるし、カーラ、チャーツクラタントラと云ふものもある。いろ／＼ありますが、其中で二つだけ實に立派なものがある。外の者は折々丁數が缺けて居つたりするが、其二つは非常に立派で完全なものである。一つは法華經である。一つは佛教の詩集である。これは又詩集其ものよりも材料が面白いのです。ヒマラヤ山中に出来る樹の皮です。紙の様に製造したのではなく、樹の皮其もの、黒い處などを去つて、其れに字が書いてある。それが二百三十六枚ある。先日美術學校で御見せ申したは其れです。ターラの葉と云ふのは長さ二尺位に二寸幅位のもので、それに梵字で經文が書いてある。梵字も古ナーガリー體で書いてある。其經文は一寸一千年程前のものであります、今より九百年程前にバندن、アンデシャと云ふ坊さんが持つて這入つたのです。兎に角其二つは實に結構なものであります。其文字はいろ／＼の字體がありまして、古ナーガリーとかブジモールとかゴモールとか、ランツアとか又はネワリ字で五體ばかりに書いて居る。一つは西藏文字體にも書いてある。いろ／＼になつて居るけれども、其語は何かと云へばサンスクリット語である。そこで先づ私は目錄を作つた。印度へ歸るの

を非常に急ぎましたから殆ど徹夜でやつて翌日晝頃までに目録を作つてしまつた。そこで作り上げてから考へました。どうも此目録だけ持つて歸つて世界の學者或は日本の學者に示して斯う云ふものが西藏には確に有つたと言つた所で果して其れを信ずるや否や。そんなものは誰でも書いて拵へることが出来ると言はれても仕方がない。此前に西藏から歸つた時分にも随分疑はれた。彼奴は西藏に這入つたなんと言ふけれども實際行つたのではない。小説を書いて居るのだと云ふやうな悪口を言はれた。新聞紙ばかりではない、随分立派な學會からして否定された位である。是れだけのものを持つて行つて示した所が逆も人は信用しまい、困つたものだ。若し金で買へるものなら金を借りてゝも買つて行きたいと思つたけれども國寶だから買ふことは出来ない、何とか旨い工夫はないものかしらんと首を傾けて居つた。所へ住職が來て、貴下は是れがみな讀めたかと云ふ。エーみな讀めた。讀んで斯う云ふ目録を作つた、是れは何だ、是れは斯う云ふものだと言つて説明すると、どうぞ其れを西藏語で書いて呉れと言ふ。それから一々西藏語で經文の名を表紙へ書いてやりました。是れは有難い、是れまで随分學者は澤山來たけれども之を讀む者は一人も無かつた、貴下は皆讀める、感心だと言つて非常に讚嘆して居りました。それから貴下の名は何と云ふかと言つて聞くから、私の名は慧海と云ふ。斯う申すと、イヤそんな名ではない、私は貴下の名を知つて居ると言ふのです。妙なことを言ふと思つた。こちらにも禪宗坊主ですから成可くさう云ふ問答の氣合には後れを取らぬけれども、随分妙なことを言ふと思つて黙つて居つた。そ

れから一體慧海と云ふのは何處の語だと聞くから、これは私の國の日本語だ。西藏語で言つたら何う言ふか。西藏語ではセーラブギヤムツォと言ふ。ヤーラブ、ギヤムツォ：ア、其人に用がある。なぜセーラブ、ギヤムツォに用があるのか。イヤ實は貴下は知つて居る筈だ、尋ねる必要はない。なぜ。なぜと云つて……あの經典を入れてある藏を見ると新しいだらう。新しい。實はあれは五年前に建替へたのであつて、其時古い藏を毀したら棟木に彫込んである處があるから變だと思つて見た處が、一つの書付が出た、それを見ると非常に古いものであつて、東の方からセーラブ、ギヤムツォと云ふ者が經典を取りに来る、其者が來たら之を皆渡せと書いてあつた。斯う言ふのです。實はそれは何か話を作つて言つたのではないかと思ひましたけれども、兎に角こつちはお經を得たいのであるから、それなら貰はうと斯う出なければならぬでせう。そんなことを疑つたり何かして居る時でないから、それは結構だ、それでは早速貰つて行くが何うだと言ひますと、それはいけない。貴下が其事を法王に上申して呉れることが出来るぢやないか。斯が法王は呉れると言つても側に附いて居る者が承知しないから呉れない、印度から千年も前に傳へられた大事な寶物だから誰にも呉れる氣遣ひない。それでも私に呉れるやうに定まつて居るではないか。それは定まつて居る。それでは何うか今の話の書付を見せて呉れ。宜しいと云ふので持つて來た。所が、其容れてある箱に錠が卸して居る。さうして鍵は弟子が持つて居るが今寺に居らない、四五日逗留して歸つて來ると云ふ話です。そんな事の爲めにわざ／＼待つて居る譯に往かない



それは御免蒙ると言ふと、暫く考へて居つたが、それでは其經典の中一部か二部位なら持つて行つても宜しいと言ふのです。あとは何うする。あとは厚いやつを二つに分けて置く。二つに分けて三十九帙に數さへ合つて居れば宜しい。それは好い工夫だ、それでは一つ貰つて行かうと、斯う云ふことになりました。それでは貴下の氣に入つたのを二部持つてお出でなさい。それは有難いと云ふので早速貰つた。貰つた時に先生は頻りに私に頼んだ。どうか之を貰つたと云ふことを西藏では言つて呉れるな、言はれると私の首が無いからと言つて頼む。イヤそれは決して言はぬ。此處は西藏でないから話をして構はぬが、さう云ふ順序で二つの寶物を得て來ることが出來た。實に奇態な話でありますけれども、得て來た順序をお話すれば其れなんです。其れをお話しないと本當のことが分らない。或は私がそれを讀めたのを感じだと思つて、斯う云ふ讀める人に與へたら宜からうと云ふ考から其話を持出して呉れたのかも知れない。それはよく分らないが、兎に角事實其物を得て來たと云ふことだけは確であります。現に西藏の國寶であつて法王でも氣儘に出來ぬものを貰つたのです。住職が言ふ如く願ひ出して決して得られるものではない。そんな書付は貴様が拵へたのだらうと云つて住職が罰せられる位なことに終はつてしまふかも知れぬ。實に妙な因縁で二部だけ貰つて來ましたので、此に於て私の作つた目錄も活きて來て、日本の人のみならず世界に對して之が證據であると云ふことを示すことが出來るやうになつたのは非常に私の幸とする所であります。

附加への事ばかりになります。序に申上げて置きますのは、私が此度西藏に參つていろ／＼好いものを得たと云ふことに就きました。是れは自分の力で得られたのではない全く佛の力に依つて得られたのであると思ふやうな點が澤山あります。若し佛力と云ふものを信じない人は無意味であると思ひませうけれども、私はそれを信じて居る者であります。殊に私の死すべき命——何うしても死ななければならぬ、死んで居るべき筈の場合が度々あつたが、さう云ふ處も免れて來たことは確に佛力のお蔭に因ると云ふことが出來ると思ひます。又二度目に印度へ出た時分には、朶士林に於て英國の法律で定めてある所の關所を二度まで破つた人間であるから、何うしても私は法律の制裁を受けねばならぬ人間であつた。六箇月の懲役に服して五千ルーピーの罰金を拂はなければならぬ。罰金を拂はなければ二三年も牢の内で辛抱しなければならぬと決心して居りました。それであるから西藏より持出した荷物を横濱正金銀行の支店へ預けて、さうして自分が牢に這入らうが何うしやうが其荷物だけは日本に指して安全に送られるやうに支店長の西卷氏と云ふ方に頼んで置いた。斯くして朶士林ダイツリンに出て參つて、何時捕縛されるかと思つて待つて居りました所が、印度政府及英國政府に於て私を捕縛する事に就いて何か會議が開けたらしくあつて、急には捕縛しなかつた。仕舞には捕縛しないのみならず、私を歓迎して且つ日本へ送ることになつて、私の爲に送別會を開いて呉れた。印度朶士林の市公會堂に於て送別會を開いて呉れまして、ベンゴル州のガバーナーロード、カルマイカルがやつて來て送別會を司つた。さうしてガバー

ナーの次のビートソン、ベルと云ふ人が大變雄辯を振つて演説をした。その演説によつて私の捕縛を免れた理由が能く分つたのであります。ビートソン、ベル氏は曰く。

吾輩が茲に歡んで日本の河口慧海氏を迎へ且つ日本に送る第一の理由と云ふものは、人間として如何なる困難にも堪忍んで之を打破つて自分の目的を達せられたと云ふことは其勇氣實に稱す可きことであつて、それを欣慕するの餘りに人類の一員として迎へ且つ送るのである。

次に。

吾輩の信ずる宗教は異つて居るけれども、人として自分の信ずる宗教の爲に命を捨て、仕事をするに云ふことは非常に結構なことであるから、それを吾輩は欣慕して迎へ且つ送るのである。

斯う云ふ様なことを三つ許り理由としな述べまして、それから最後の理由に曰くです。

吾輩が今斯うして述べて居るのは單にビートソン、ベルなる一個人として言ふのでなく、所謂英領印度政府の高等官を代表して言ふのである。

と述べました。ですからなかく重いので、つまり英領印度政府のガバーナーの代理に述べますと云ふのと同じことです。而して其言ふ所に依りますと。

今日我國（英國）は非常な助けを我が同盟國から得て居る。其同盟國即ち河口氏の屬して居るところの日本國は我が英國と長い間同盟して居つて其同盟の爲に盡された所は實に忠實な遣方である。現に青

島の如きを征服し東洋に於ける獨逸艦隊を絶滅せしめて吾々をして安穩に此印度に居らしめる、即ち吾々が安心して此印度に往んで居ることの出来るやうにして呉れたのは全く我が同盟國の力に由るのである。此同盟國の一員を今日歓迎し及び送別すると云ふことは吾々の最も光榮とする所である。

斯う云ふ風に結んだのであります。此事は日本へ行つて特に紹介して貰ひたいと云ふやうな意味らしかつたのです。それで私は免されたのであります。其免された事の善惡は兎も角もとしまして、兎に角私は日本人であると云ふことの爲に、即ち日本國家の威光の下に捕縛を免れた、即ち縲綆の苦を受くべき筈に定まつて居るのであつたが其れを免れたことになつて居る。これは全く日本國家をして所謂世界の一等國と云ふ迄に進めた所の諸君の力に由つて私は助かつたのであると信じて居るのであります。つまり私が日本國民の一員であつて日本國と云ふものが常に背景に立つて居ると云ふ事竝に唯今申した佛力とに由つて私の今度の旅行が完成したものであると云ふことを喜んで皆様に申上げる次第でございます是で止めまして、あとは皆様の御質問に答へることに致します(完)

